

都市格の形成も意識した富山電気ビル

山田昌作は、企業誘致を展開する一方で、誘致企業を富山に定着させる手段も講じました。

日本海電気の本社が入る富山電気ビルは、1936年（昭和11）3月に竣工しました。同年2月、ビル運営会社「富山電気ビルディング」の設立の際に、山田は誘致企業を巻き込みました。同社創業時の株主構成は、日本海電気とその関係会社の黒部川電力・小松電気のほか、大同電力、日電証券、呉羽紡績、日本カーバイド工業、日本鋼管、日満アルミニウム、日清紡績、大日本人造肥料、電気化学工業、日満亜麻紡績、日本曹達など多くの誘致企業が名を連ねたほか、高岡電灯、不二越工業、第一ラミー紡績などの地元企業および個人20人も共同出資に応じました。

本ビルは、オフィスビルとして日本海電気の本社機能を満たすだけでなく、ホテル、レストラン、大ホールなど多くの機能を有する日本海側初の文化的総合ビルでした。地域開発には、経済の発展だけでなく、地域に住む人々の文化や福祉の向上が必要です。本ビルは、産業のシンボルとして建設されただけでなく、地元の社交倶楽部を設立するなど文化の発展や地域の福祉充実をも視野に入れた都市格の形成を目指したものでした。

*戦後の電力不足の際、誘致した企業が撤退しないよう、北陸電力が神通川上流高原川に持つ二つの水利権を譲渡し、北陸電力とともに共同出資して設立した水力による共同自家発電。当初の出資引受会社は北陸電力、日産化学工業株式会社、昭和電工株式会社、日本鋼管株式会社など電解電炉12社。電力事情の好転とともに株主は上記の4社になりましたが、設立から70有余年を経た今、出資企業にとって欠かせない存在になっています。



竣工直後の富山電気ビルディング



北陸電力
アーカイブギャラリー

Hokuriku Electric Power Company 北陸電力の歴史
ARCHIVE GALLERY